平成 19 年度第 2 回研究会　9 月 14 日：　文学部　大会議室：　15：45～17：00

Paul Auster の *The Invention of Solitude* における新しいユダヤ性
——普遍化とのせめぎ合いから——
Paul Auster's New Jewishness in the USA
: In the Analysis of *The Invention of Solitude*

新田 玲子 (広島大学：教授)

1．序

第二次世界大戦後のユダヤ系アメリカ作家の中でも、Saul Bellow や Bernard Malamud らが文壇に新風を吹き込んだ大きな要因のひとつは、ユダヤ系移民のディアスポラ体験や移民体験、それらと結びつき、イディッシュ文学にも繰り返し登場する愚かな失敗者〈シュレミール〉など、明らかにアメリカ的でない特徴に、道徳性や精神性といった普遍的性質を表象させ、それらがアメリカ合衆国で欠けていたり、軽んじられていることを強調することで、逆説的にアメリカ的な作品を生み出したことにある。

しかし、2007 年の *Nation* 誌で William Deresiewicz が、"During the three decades after World War II . . . [t]he old country was still fresh in memory, its accents and attitudes still potent in their hold over feeling and expression. Anti-Semitism was still pervasive, the Holocaust a recent event, Israel a source of unmitigated pride. . . . But over the past three decades, the dense particularity of American Jewish life has, outside the Orthodox community, largely disappeared."と概観しているように、第二次世界大戦から 30 年が過ぎた 1970 年代に入ると、ユダヤ系アメリカ人の中産階級化が定着する。その結果、それまでは社会的敗者でアウトサイダーだった Bellow や Malamud の主人公達でさえ、次第にアメリカ社会の一員としての役目を担い始める。そして主人公の社会的経済的状況が改善するにつれ、物質主義的なアメリカ社会との差異を強調した彼らのユダヤ性も徐々に薄れゆく。

しかしここで薄れゆくユダヤ性は〈アメリカ的なもの〉と対置されるようなもので、Stuart Hall が"New Ethnicities"において、"dominant notion which connects it [ethnicity] to nation and 'race' " (447) であり、単一で統合的なフレームワークで捉えられてきた従来のエスニシティと分類するような種類のものである。Hall はこういう古いエスニシティに対し、現在では"a positive conception of the ethnicity of the margins, of the periphery" (447) といった、個人個人で異なる形を取ってその人の個性を形成している新しいエスニシティが生じていることに着目する。それは、

"We are all, . . . *ethnically* located and our ethnic identities are crucial to our subjective sense of who we are." (447) と言えるような、個人の生い立ちや個性と結びつく多様多彩なものであり、一見アメリカ社会に溶け込んで見える若いユダヤ系作家の個人的特性にも見出し得るようなものである。

そこで本論では、ユダヤ性がその形をより普遍的な形に変化させながら若い世代に受け継がれ、新しい文学表現を生み出している点を明らかにするため、二世代目作家の Bellow や Malamud よりも若く、1980 年以降特に活躍が目覚ましい三世代目作家 Paul Auster の処女長編小説、*The Invention of Solitude* (1982) を題材に論じる。特にこの作品に注目したのは、後の Auster の作家としての基本姿勢が明確に示されている作品であるだけでなく、一方でユダヤ的習慣からの精神的隔たりを繰り返し唱えながら、〈父-息子の関係〉など、伝統的なユダヤ的要素が積極的に利用されているからである。従って、Auster が伝統的なユダヤ性をどのように変容させ、新しい文学表現としているか分析することで、作品の表題、〈孤独の発明〉によって Auster がどのような作家を目指そうとしたのか、Auster 文学の神髄に迫ることもできるだろう。

2．新しいユダヤ性と自己探究

Bellow や Malamud が伝統的なユダヤ文化やユダヤ人の移民体験、あるいはユダヤ的習慣を、郷愁や理想を籠めて描いたのに対し、Auster はユダヤ的題材を用いながらもそこに明白な距離を置こうとしているように見える。例えば、作品の前半の"Portrait of an Invisible Man"で、彼は父に連れて行かれたユダヤレストランでの強い違和感を表明している。"I, who was being brought up as an American boy, who knew less about my ancestors than I did about Hopalong Cassidy's hat." (28) という述懐は、父が属していたユダヤの伝統よりも、アメリカの伝統である野球により大きな共感を示す若いユダヤ世代の姿がユーモアを籠めて眺められている。

Ranen Omer-Sherman は Auster よりも年長のユダヤ系三世作家である Philip Roth について、"Roth's narratives presuppose that there is no longer a truly Jewish exile experience relevant to the circumstances of American Jewry. . . ." (271) と、すでに Roth にとっても貧しい移民体験が遠くなりつつあったことを指摘している。ただ Roth の場合、古い伝統や慣習が批判や揶揄の対象にされる一方で、依然ユダヤ的な道徳性や思考に縛られていた。これに対し、Roth よりもさらに若い Auster は、ユダヤ的な伝統や慣習に共感もないが反発も感じていない。事実、違和感をユーモアを籠めて眺める心理的余裕は、両者の隔たりが Roth の場合よりも一層大きいことを印象付けている。

作品の後半、Auster が自身を A.として三人称で眺め直す"The Book of Memory"

においても、A.はユダヤ民族にとって重要な宗教儀式を、卑近なアメリカ的体験と重ねて笑いを引き出す。

> In his Jewish childhood, A. can remember confusing the last words of the Passover Seder, 'Next year in Jerusalem,' with the ever-hopeful refrain of disappointed fandom, 'Wait till next year,' as if the one were a commentary on the other: to win the pennant was to enter the promised land. (117)

過ぎ越しの祭りは新年祭についで重要なユダヤの宗教行事である。それはユダヤの民がエジプトにおける奴隷の身から解放されたことを祝うものであると同時に、荒野をさまようディアスポラ状態を記憶する祭りでもある。そして、祭りの最後、来年こそはイスラエルで会いましょうという言葉には、何千年も異邦人として暮らしてきたユダヤの民が抱き続けた、祖国に対する深い思いが籠められている。だが、Auster はそれを贔屓のチームの優勝を願う、非常に卑近なアメリカ的体験に重ねる。それによって生じる無邪気な笑いは、そこにユダヤの慣習やユダヤ人への揶揄がないことを示す一方、Auster にとって、ユダヤ的な習慣というのはその程度の意味しかないということも表している。

しかし、逆説的ではあるが、伝記的要素を用いた作品において、たとえユーモラスに隔絶を強調してはいてもユダヤの伝統に触れざるをえなかったことは、Auster の育った環境にユダヤ的習慣が依然残っていたことを意味している。にもかかわらず、そうしたユダヤの習慣との距離を強調し、彼が理解したり、気付いていたりしているユダヤ的な点に敢えて触れない。そこに、伝統的なユダヤ性を解体し、自身の文学的目的にかなった新しいユダヤ性を作り出そうとする Auster の文学的試みが窺える。そしてそれは、父方の祖母が、父方の祖父である夫を射殺した事件とその影響の偏った描写では一層明白になる。

この事件について Auster は、"Auster and his wife . . . had had trouble on several occasions over money. They had also quarreled over the fact that Auster [illegible] friendly with a young woman know to the wife as 'Fanny.' " (37) と書かれた新聞記事を紹介し、夫殺しの直接の原因が浮気や金銭トラブルという、エスニシティと無関係のよくある出来事のように描く。だが祖母の告白とされる証言について、"Since my grandmother spoke almost no English, I assume that this statement, and all others attributed to her, was invented by the reporter." (38) という過程でさりげなく示唆される、アメリカで英語もろくに話せない祖母の状況は、経済的にも精神的にも孤立していた移民一世の典型的な体験である。アメリカにおける新参者の意識が強かった時代のユダヤ作品であれば、夫の裏切りが殺人に結びつくほど彼女を

精神的に追いつめた背景に、そうした移民事情を考慮したに違いない。だが Auster は、むしろそうした連想を極力切り詰めている印象を与える。

同様に Auster は、この出来事の後、父の家族が他者から孤立した貧窮の生活の中で家族の結束を強めたと語る。その結果、自転車を買おうとこつこつと貯めた父の金を母親が容赦なく生活費に使ってしまったときも、"This was rule by caprice. For a child, it meant that the sky could fall on top of him at any moment, that he could never be sure of anything." (50) と受け止められ、父があらゆるものに対して不信感を抱くようになったとされる。そして、異常なほどの吝嗇や物質的成功を尺度とする父の価値観を、"a way of making himself untouchable" (52-53) とし、不幸の不在を保証する道具として金銭を重んじたからだと分析する。

このように、Auster は彼の目に奇異に見える父の性格を、極めてありふれた家庭内の事情で起きた事件に基づく、極めて個人的な反応として描き出す。しかし、周囲からの孤立も、不意に降りかかる不幸も、身の安全の確保に金銭を重んじる習慣も、これまでのユダヤ系作家の作品であれば、異民族支配の中で生きてきたユダヤ人のディアスポラ体験と切り離せないものとして扱われたに違いない。実際、彼の父がエジソンの会社に勤め始めたとき、ユダヤ人と分かった途端解雇されたという言及からも明らかなように、父が若かった頃はあからさまな反ユダヤ主義が依然通用しており、ユダヤ人固有の事情というものが少なからずあったはずである。それにもかかわらず、当時の社会状態や移民一世の片親に育てられるユダヤ人的状況を無視し、現代のアメリカ的尺度で父の人格に普遍的分析を加えていることは、通常であれば、無理があるだけでなく、不自然でもあると見なせるだろう。[1]

"Portrait of an Invisible Man"において、Auster は父の死をきっかけに、彼の存在の希薄さに愕然とし、"If I do not act quickly, his entire life will vanish along with him." (6) と、父について書くことの必要性を強く感じたと記す。だが、客観性を欠いた分析を推し進める Auster の真意が、父の実像を描くことにあったとは到底考えられない。むしろ、普遍的でアメリカ化された Auster 自身の視点を強調することで、彼は死によって存在が消えてしまいそうな父とは異なる、自分自身の生き方を模索しているように見える。実際、父の姿を探し求める枠組みの中にそのような自己探究が組み込まれていればこそ、越川芳明は『アメリカの彼方へ』において、「すべての探求は自己探求である」と述べると同時に、この作品が Auster にとっての「存在証明の書」(190) であると断じているのである。そしてその存在証明が作家で身を立てようとする姿勢と結びついていることから、Michel Contat は Auster とのインタビューで、"You give birth to him (your father) by writing about him and at the same time you give birth to yourself as a writer." (182) と感想を述べて

いるに違いない。

Auster は、1979 年 1 月 15 日に父親が死亡する直前、私生活においても、作家活動にも行き詰まっていたことを、"I had run into a wall with my work. I was blocked and miserable, my marriage was falling apart. I had no money. I was finished." (53) と、のちに Adam Begley とのインタビューで打ち明けている。従って、父の遺産によって著述に取り組む時間的余裕を得れたことや、同時期に結婚を解消して新たな生活を始めたことで、彼は自分自身の内面を問い直し、生活を立て直そうとしていたに違いない。その作業が *The Invention of Solitude* に投影されたのは自然なことだっただろう。そして、自伝的要素に含まれるユダヤ的題材を用いながら、それを反ユダヤ主義やユダヤの伝統から切り離し、父個人の責任に帰することで、父の選択を普遍的な問題に還元し、それによって、表面的な交際を繰り広げながら自己の殻に閉じこもった父の生き方とは真反対の、書くという孤独な行為を通して多くの人々に繋がろうとする、彼自身の理想を主張を為す基盤としたのである。さらに、このようにユダヤ的題材をひとひねりして用いることで、彼は新しいユダヤ系アメリカ人作家として、独自のユダヤ性を展開することに成功したと言える。

3．伝統的な〈父–息子の関係〉の解体と〈孤独の発明〉

父を描くにあたり Auster が用いた新しいユダヤ性は、伝統的なユダヤ移民のイメージや反ユダヤ主義に直接言及しないという、目に見えない間接的表現だけではない。もっと明確に伝統的なユダヤ性を意識させながら、それを解体し、独自の世界観を表明する手法も大いに利用されている。その一例が、作品全体を貫く基本構造に深く関わる〈父–息子の関係〉である。

例えば Stephen Fredman が、"Within the masculine genealogy of this text, all of A.'s hopes for regeneration are transferred to his son." (29) と、この作品の基礎に男系の継承があることを前提に作品を分析しているように、この作品には様々な男系の継承が強調される。その一方で、女性が関わる継承はほとんど描かれていない。Auster が"I was my mother's boy, and I lived in her orbit." (20) と主張するとおり、母親の影響を強く受けて育ったのが事実であれば、この描き方には極めて作為的なものが感じられる。

もちろん Auster が母でなく、父親にこだわった背景には、Contat とのインタビューの中で、"But my mother doesn't really enter into the story. I never had problems with my mother; it's not a difficulty to be overcome." (183) と説明しているような、彼と両親の間に見られた固有の事情もあっただろう。しかし同様の偏った扱いは、Auster の父親の場合にも見られるのである。というのも、父親の母親は、"She was

the matriarch, the absolute dictator, the prime mover who stood at the center of the universe." (33) と描かれるほど、家族の絶対的支配者だった。だが、"It would be wrong to say, however, that he was a mother's boy. He was too independent, had been too fully indoctrinated into the ways of manhood by his brothers." (51) と、Auster の父親は、彼の母親ではなく、彼の父親の立場に取って代わった男兄弟に強く影響されていたことが明言されているからである。

Auster の母方の祖父母に対する扱いも同様で、祖母の姿はほとんど見えないのに対し、祖父の死と彼についての思い出には何頁も割かれている。さらに、Auster 自身の命の継承者としても、息子の存在が格段に大きい。この時期、彼が自分の子供として息子を強く意識しているのは、まだ息子しかいなかったからで、子供＝息子、だったと主張できるかもしれない。だが、彼の妹が生まれた当初、彼の父が、"With his daughter, . . . it was somewhat easier for him" (24) と、息子に対するほど構えていないのは、継承者としての息子に対し父親として負う責任を娘に感じる必要がなく、愛情の対象とするだけでよかったことを意味していないだろうか。

このように、Auster が伝統的なユダヤの〈父−息子の関係〉につながるような、父系の継承を強く意識していたことは明らかである。しかし、伝統的なユダヤの〈父−息子の関係〉では、父は息子に尊厳ある人間としての生き方を示す精神的指導者の役割を果たすにも関わらず、Auster の父親は息子にとって、作品前半の表題が示すような"an Invisible Man"にすぎなかった。Auster はまた、"Earliest memory: his absence." (20) と、父親が精神的な意味で彼に何ももたらさなかったと断言する。作品後半の"The Book of Memory"で、彼が自身の姿を三人称の A.の行為として客観的な視点から眺め、"When the father dies, he writes, the son becomes his own father and his own son." (81) と記すように、彼にとっての父の生き方の継承は、かつての〈父−息子の関係〉のような、父の生き方を学び、それを次の世代に受け継ぐ、直線的で単純なものとは異なっていた。息子は父から確かに命を受け継いではいるが、継承に値する生き方を与えられてはいないからである。その結果、息子は父の死をきっかけに、継承すべき生き方の欠如を自覚し、自らそれを作り出す自身の父となるとともに、それが未来に引き継がれるに値する生き方かどうか検証する、自身の息子になる必要にも迫られるのである。

Auster が継承に値する生き方として選ぶのは、作家となることだった。彼に物語の才があるのは、父や母方の祖父が長けていた物語の才を引き継いだものだったかもしれない。しかし、彼は彼らの物語の才について語りながらも、彼らの物語行為と自身の〈書く行為〉とを同一視することはない。というのも、父の真らしい物語は自身を他者から隠す嘘として機能していたし、"a poor Jewish boy on the

make" (119) であった母方の祖父も、"In so doing, he managed to inflate the world, to turn it into a more compelling and exotic place for himself." (119) と、物語の才で現実から目を逸らせて夢を見ていたからである。このように、他者と心を交わらせることも現実の実態を見据えることもなく、自身の内部へ後退してゆく心の在り方を、Auster は"solitary"と呼び、次のように定義する。

> Solitary. But not in the sense of being alone. Not solitary in the way Thoreau was, for example, exiling himself in order to find out where he was; not solitary in the way Jonah was, praying for deliverance in the belly of the whale. Solitary in the sense of retreat. In the sense of not having to see himself, of not having to see himself being seen by anyone else. (16-17)

"solitary"が他者と実際に交流しながら、内面において他者に背を向けるのに対し、物理的にはひとりであっても、心が広く世界に通じるような状態を、Auster は"solitude"と呼ぶ。この言葉について彼は、Larry McCaffery と Sinda Gregory とのインタビューで、"I don't attach any negative connotations to it." (313) と述べた上で、"you don't begin to understand your connection of others until you are alone. And the more intensely you are alone, the more deeply you plunge in to a state of solitude, the more deeply you feel that connection." (315) と説明している。実際、"The Book of Memory"でも、A.は 1956 年にパリで作曲家 S.の極端に狭い部屋を訪れ、そこに"an entire universe" (89) を見出し、"the infinite possibilities of a limited space" (89) に感動している。そして、ひとり部屋に閉じ籠もり、自己の内面を見つめながらものを書き、他者や外の世界と深く繋がる作家になること、言い換えれば価値ある"solitude"を発明する者になることこそ、父親を存在薄い人間にした"solitary"を乗り越え、彼が残した物質的遺産を精神的価値を持つ遺産に変えて息子に伝えようとした、Auster ならではの生き方に他ならなかった。

伝統的なユダヤの〈父–息子の関係〉を連想させる父系の継承を意識させながら、継承の不完全さによって伝統的なユダヤ性と距離を置くことで、Auster はユダヤ的背景を持つアメリカ作家として、自己の体験を通して広く、深く、他者や現実と繋がってゆく作品を作り出そうとする。そして、後半の"The Book of Memory"で用いる題材や引用では、ユダヤ的なものと非ユダヤ的なものを明白なほど意図的に織り交ぜ、ユダヤや非ユダヤといった枠を故意に取り去る。同様に、自身の継承に男系を選びながらも、作品の最後近く、"hopelessness" (156) の状態に閉じこめられたときの慰めとして、"the image of his son. And not just his son, but any son, any daughter, any child of any man or woman." (156) と、未来を引き受けるすべての

子供に意識を広げ、作家 Auster が伝統的なユダヤの枠を超えた作家であることを印象付けようとする。

ただ、無限の広がりを持つ世界と他者へ繋がってゆく意識は、"solitude"の中で自身と向き合い、〈記憶〉という、彼の出自のユダヤに関わる体験を通過して初めて獲得される。Dennis Barone が Paul Auster に関する最初の本格的な批評集の前書きで、"It is interesting to note that while Auster does not provide an explicit centrality for Judaism in his work, the Jewish tradition is ever present." (23) と、彼のポストモダン的性格がユダヤの伝統と深く結びついている点を指摘するのも、彼の作家活動がユダヤ系アメリカ人という彼の存在に基づき、その出自は無視できないからに違いない。そして、このような "solitude"の発明の結果もたらされた Auster 独自の新しい生き方や書き方が、父や祖父のユダヤ体験や伝統を新しい世界と時代に合わせながら形を変えて受け継ぐ側面を持ち合わせているが故に、彼を単なるアメリカ作家として論じれば見失ってしまう彼の新しいユダヤ性が、彼の作品を論じる上で重要なのである。

4．新しいユダヤ性とアメリカ的資質

Derek Rubin は Auster がアメリカ化しているとはいえ、作品にはユダヤ人のディアスポラ体験に通じる、"the characteristically Jewish trait of longing, of yearning, of 'hunger'" (61) があることを指摘する。そして、それが"particularly Jewish" (68) であっても"not exclusive to the Jews." (68) であり、"also found in the *American* attitude toward financial success." (68) であるが故に、Auster は典型的なアメリカ的性格も帯びるのだと主張する。Henry Bial が最近のユダヤ系アメリカ作家や演出家による演劇について、"Quite frequently, what a spectator identifies as Jewishness is equivocal, affective, and not exclusively Jewish." (18) と指摘するように、[2] Auster のユダヤ性にもアメリカ的特徴と重なるものが少なからずあることは事実である。そしてこのような特徴には、Bial がユダヤ性として認識するか否かは受け取り手の側にかかっていると見なすような、敢えてユダヤ性と分類しなくとも作品解釈に大きな影響を及ぼさないようなものもある。

反面、本論で示そうとしてきたように、Auster のユダヤ性には、ユダヤ的性質を正確に捉えることが作品を評価する上で不可欠な場合もある。特に、"solitude"において自分自身の内面を掘り下げながら外の世界と繋がることを作家姿勢の基本としている Auster は、Hall が古いエスニシティと見なすような、民族的伝統や歴史に結びつくユダヤ性を積極的に取り込む。そのうえで、彼はそうした伝統的ユダヤ性を解体し、Hall が新しいエスニシティと呼ぶような、彼個人の生き方と結びついた独特の表現に変化させている。しかも、そのポストモダン的脱構築に、

現代ユダヤ系アメリカ作家としてのAusterの独自性と芸術性が見事なまでに昇華しているのである。

例えば、Austerは移民体験が色濃く残る父という人物を題材にしながら、同時代のユダヤ人体験や反ユダヤ主義といった客観的情報を充分に与えないことで、見えない人間としての父親像を鮮明に描き出した。また、〈父-息子の関係〉を意識させながら、継承される伝統の不在によって、拠り所を失った現代人の姿と、彼らが背負う、自身の価値観を確立し、継承されるに値する生き方を生み出す必要性を明らかにした。これらの描写には、1970年代のアメリカ人の思考や行動に大きな影響をもたらしたポストモダニズムを論じたJean-François Lyotardが、その大きな特徴として掲げる脱正当化 (97) や不安定さ (138) が前景化されており、ユダヤ的題材を用いながらユダヤの枠を超えた概念を表現するAusterの著作姿勢を鮮明に示している。

もっともWilliam Dowは、"Auster has extended the postmodernist topos to include the power of contingency in his narrative emphasis on ambiguity and coincidence" (52) と、Austerのポストモダニスト的性格を肯定しながらも、"If Jean-François Lyotard is right in concluding the 'enlightenment' values (truth, progress, virtue, homogeneity) are no longer applicable in a postmodern epoch, *Invention*, in its reflection on the human condition and emphasis on the ethical component of the intellect, is at once a postmodernist extension and contravention." (52) と、*The Invention of Solitude*にはLyotardが規定したようなポストモダニズムからは排除された知的倫理が含まれていることを指摘する。ひょっとしたら、このような知的倫理は、聖書の民であるユダヤ人の民族性と見なされてよいようなものかもしれない。従って、Austerはポストモダニズムの枠にさえ縛られず、そこに伝統的なユダヤ性を織り込むことで、その枠さえ超えていると主張することも可能だろう。反面、「現代文化の根源的な流動性のもと、対象領域を狭く限定したり、固定化したりせず、どこまで意識的にジャンルや境界線を〈侵犯〉し、〈越境〉することができるか」(275) こそポストモダン現象だと見なす小林憲二のような批評家の観点からすれば、Austerのこの随意性こそ、典型的なポストモダニズム的姿勢と見なされるのかもしれない。

しかし、ここでもっとも重要なことは、伝統的なユダヤ性であれポストモダニズムであれ、Austerが自在に解体し、何であれひとつの枠組みに留まろうとしないことだろう。それをエスニシティの観点から考えるとき、ディヴィッド・A・ホリンガー (David A. Holinger) が『ポストエスニック・アメリカ』 (*Postethnic America*) で為している主張が思い出される。彼は、現代では「固定したもの、与えられたものという含みがある」(22) アイデンティティよりも、「与えられるも

のではなく自発的であることを好み、多数のアイデンティティを持つことを評価し、範囲の広い共同体を推進し、構築物としての民族人種集団の性質を認識し、新しい集団の形成を民主的社会の通常のできごととして受け入れる」(20)「帰属（アフィリエーション）」が重要となっており、そのような帰属が多数存在するのが現在のアメリカ人の姿だと分析する。彼はアメリカにおける多民族間の格差や、彼らと主たるグループとの軋轢を充分に考慮しておらず、理想論に傾きがちだが、彼自身が属するユダヤ系アメリカ人の現状としては無視できないものがあるように思える。というのも、Auster が Mark Irwin と行ったインタビューにおいて、Irwin が"Both John Ashbery and Marshall McLuhan have said that part of the American-ness of poetry and the novel is 'to let everything in' as opposed to the more European notion 'to control it.'" (334) とアメリカ的な性格とヨーロッパ的な性格とを区別したとき、Auster は、"I think that's been the great glory of American writing, as opposed to, say, European writing: the fact that we've allowed things in. . . . I feel that I want to stay open to everything, that there's nothing that can't be an influence." (334) と手放しで同意しているからである。Auster はある意味、ホリンガーが思い描いた〈ポストエスニシティ〉をもっともよく体現するアメリカ作家と言えるかもしれない。[3]

作品の後半部分の"The Book of Memory"で、Auster は雑多と見えるほど幅広い要素を取り込んでいる。そこには、グローバリゼーションが進む現代、国際的な影響を積極的に取り込み、その一方でどの枠組みにも限定されず、自在に行き来することで、広く世界に通じる自由な内面を—"solitude"を—作り出そうとする、Auster ならではの姿勢が如実に表れている。そして、その独自の姿勢でもって伝統的なユダヤ性は新しいユダヤ性に作り替えられ、新しいアメリカ作家 Auster を形成する重要な役目を果たしているのである。

注

[1] 父方の祖母は夫殺しについて最終的に無罪になる。これについて、"Attorney Baker's opening remarks were calculated to draw every possible ounce of sympathy from the jury" (45) と、Auster は弁護士の雄弁によるもののように書き進めてゆく。だが、この事件を扱った新聞記事についての Auster の最初のコメントは、"They are a mixture of scandal-mongering and sentimentality, heightened by the fact that the people involved were Jews – and therefore strange, almost by definition – which gives the whole account a leering, condescending tone." (36) であり、キリスト教徒が関わらないこの事件が軽視されていた可能性がある。すなわち、ユダヤ人同士の事件であったことで、一般アメリカ市民にとっては重要ではないし、理解もできない風変わりな出来事

と見なされ、そうした反ユダヤ主義的な見方が幸いして、温情的判決が下された可能性も充分考えられるのである。そして、その可能性を狡猾に仄めかしながらも、Auster は裁判を有利に進めるための通常の条件である弁護士の有能さの方を強調する描写を行っているのである。

[2] このように"*supplemental* to the dominant or gentile reading." (17) であるユダヤ性を、"caught between loyalty to the black community and the compromises necessary to succeed in a white-dominated society." (16) の"double consciousness"と対比させ、Bial は"double coding"と名付けている。

[3] 駒沢敏器は『Switch』に掲載されたインタビューで Paul Auster がフランス文学に強い影響を受けている点を指摘し、彼に「国籍離脱者」のような気がしていないかと問うている。これに対し Auster は、「僕は隅の隅までアメリカンです。生まれ育った祖国からは、切り離し難い影響を受けている」(107) と断言する。そして、駒沢が「あなたの場合は、アメリカとの距離が遠くはありませんか」(107) と重ねて聞くと、「しかし僕の本の背景は、いつだってアメリカですよ！　何か他のことを書いたことがありましたか？」(107) と、あくまでアメリカ作家であることを強調する。ここにも、彼の用いる多様な要素がアメリカ的作品を作り出すのに不可欠なものと見なされていたことが窺える。

引用文献

Auster, Paul. *The Invention of Solitude*. 1982. New York: Penguin, 1988.

——. *The Art of Hunger: Essays, Prefaces, Interviews and The Red Notebook*. 1992. New York: Penguin, 1997.

——. "Interview with Larry McCaffery and Sinda Gregory." Auster, *The Art of Hunger* 287-326.

——. "Interview with Mark Irwin." Auster, *The Art of Hunger* 327-40.

Barone, Dennis, ed. *Beyond the Red Notebook: Essays on Paul Auster*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1995.

——. "Introduction: Paul Auster and the Postmodern American Novel." Barone, *Beyond* 1-26.

Begley, Adam. "Case of the Brooklyn Symbolist." *New York Times Magazine* 30 Aug. 1992: 41-54.

Bial, Henry. *Acting Jewish*. Ann Arbor: U of Michigan P, 2005.

Bloom, Harold, ed. *Bloom's Modern Critical Views: Paul Auster*. Philadelphia: Chelsea House, 2004.

Contat, Michel. "The Manuscript in the Book: A Conversation." *Yale French Studies* 89.2

(1996): 160-87.

Deresiewicz, William. "The Imaginary Jew." *The Nation*. 10 May 2007 (28 May 2007 issue). 12 June 2007 <http://www.thenation.com/doc/20070528/deresiewicz/>.

Dow, William. "Paul Auster's *The Invention of Solitude*: Glimmers in a Reach to Authenticity." Bloom 51-62.

Fredman, Stephen. "'How to Get Out of the Room That Is the Book?' Paul Auster and the Consequences of Confinement." Bloom 7-42.

Hall, Stuart. "New Ethnicities." *Stuart Hall: Critical Dialogues in Cultural Studies*. Ed. David Morley and Kuan-Hsing Chen. New York: Routledge, 1996. 441-49.

Lyotard, Jean-François. *The Postmodern Condition: A Report on Knowledge*. 1979. Trans. Geoff Bennington and Brian Massumi. Minneapolis: U of Minnesota P, 1999.

Omer-Sherman, Ranen. *Diaspora and Zionism in Jewish American Literature: Lazarus, Syrkin, Reznikoff, and Roth*. Hanover: Brandeis UP, 1998.

Rubin, Derek. "The Hunger Must Be Preserved at All Cost: A Reading of *The Invention of Solitude*." Barone, *Beyond* 60-70.

越川芳明. 『アメリカの彼方へ』. 自由国民社, 1994.

小林憲二. 『アメリカ文化のいま』. ミネルヴァ書房, 1995.

駒沢敏器. 「Among the Three Literati: Interview with Paul Auster, Tobias Wolff, Gary Fisketjon—小説の生まれる部屋で」. 『Switch』 1991 年 1 月 25 日: 101-14.

ホリンガー, ディヴィッド・A. 『ポストエスニック・アメリカ』. 藤田文子訳. 明石書店, 2002.